

情景（秋）

宮本百合子

青空文庫

秋の景色（十一月初旬）

○曇り日　日曜。ちつとも風がない。

○すっかり黄色くなつた梧桐の葉、

○その落葉のひつかかっている槿の木の枝

○きのうの雨でまだしめつぽく黒く見えている庭木の幹。

離れの方から　マンドリンとピアノの合奏がきこえて来る。

◎ひどく雨が降っている。

○遠くの方で、屋根越しに松の梢がまばらに大きく左右へは
り出した枝を　ゆすっているのが雨中に見える。

○柿の木がすっかり葉をおとし、いくつかの熟した実を盛に雨にうたれている。

◎バスにのつて戸塚の方へ出たら雨がザーザーふっている。バスの前方のガラスを流れている。

降りる頃には　またやんでしまっていた。

◎芝居のかえり。初日で十二時になる（群盗。）アンキーとかいう喫茶。バーの女給。よたもん。

茶色の柔い皮のブラウズ。鼠色のスーとしたズボン。クラバツトがわりのマツフラーを襟の間に入れてしまっている。やせぎすの浅黒い顔、きつちりとしてかりこんだ髪。つれの女の子、チエツクのアン^{ポタージュをのんでいる}サンブル（赤、緑、黒的）黒いハ

ンドバッグと手袋とをその男がもってやっている。このよた、ちつとも笑顔をせず。

「あっちへつけとききましたから」

「おつけになって下さいましたの？」

「ええ」

〔欄外に〕

バアの女給。十二時頃 tea Room でポタージュをたべ トウ
ストをたべる。ヴィンナ、トウストマダムという女 朱 赤
と薄クリームの肩ぬきの洋装、小柄二十四五位

夕方五時すぎ。

電車道のところを見るとさほどでもないが濠の側を見ると、濃くもやが立ちこめて四谷見附に入る堤が　ぼんやりかすんで見える。電燈^街はそれにとけ込んでいる。

○電柱に愛刀週間の立看板

◎右手の武者窓づくりのところ珍しく門扉をひらき　赤白のダンダラ幕をはり　何か試合の会かなにかやっている
黒紋付の男の立姿がちらりと見えた。

○花電車。三台。菊花の中に円いギラギラ光る銀色の玉が二つある

能の猩々。

子供の図

あとから普通の電車に赤白の幕をはったのがついてゆく。新
議事堂落成祝のため。

〔欄外に〕

○皇太子の生れてよろこびの花電車（1933の暮）春日町のところ
で会った。こちら自動車。ダーやられたとき あを感じを思
い出した。

遭遇の場面

○新響のかえり。銀座。男二人女一人

アラ！ ああやつと見つけたという工合だわ

アミノ と。

◎若松に入つてゆく、奥へゆく。右手に若い男二人こつち側、あつち側に緑郎

鶴「いとこさんがいるよ」

見ると、しきりに何か喋っている

一人がしきりにこつちを見ている、

やがて気がつく。笑う。やがて緑 帽子をぬぐ。（何か自然

で、おとなしく しつけよい感じ）

鶴「あのひともこの頃顔がなかなかしつかりして来たね」

「うん、いろいろ書いてやっているからね」

林町の通りへ入ったら後から Head light、そうかな。こっち止る、うしろも止る。すると緑が出て来てドアを外からあけてくれる。そういうものごしの中にある スラリとして細かいところ。

秋の夕映

午後五時頃、

廊下へ出て見るとまるでつき当りの窓が赤い。

空を見ると

冴えた水色とすこし澱^{にご}った焰のような紅色とが横^{よこ}だんだんに空じゅうひろがっている。何だか他の季節の夕やけのように

光の暖みを感じられず 只色どりの激しさのみ感じられ、変に不安を刺戟されるような印象である。

その横まだらの空に 葉を半ば落したサイカチの梢がそびえている。

○十一月の或小雨もよいの午後四時。

暗いので部屋に灯がついている。

入った右手の安楽椅子のところに紀 ラクダ毛布を引か
ついで眠をぶっている。

②紫矢がすり 赤い友禅のドテラ引かぶって櫛のハの通つて
いない髪 青い半ぐつした。

室中に何とも云えず重い懶い雰囲気がかめている。
その同じ娘が 人中では顔も小ぢんまり 氣どる。スースー
とモダン風な大股の歩きつきで。
それに対する反感。

十一月初旬の或日

やや Fatal な日のいと。

梅月でしる粉をたべ。

午後久しぶりでひる風呂、誰もいず。髪をあらう、そのなめら
かな手ざわりのなごやかさ。

日当ぼっこ、髪かわかしカンワス椅子

柿モギの声 昔の家のことを思う

夜。暗い屋敷町

歩いている男 ホームスパン的な合外套の襟を立てて靴の音、
横丁から出て来た犬と少女。すぐつづいて男と女。

ずっと歩いている、煙草のすいガラをパツとすてた、火の粉
が暗い舗道の上に瞬間あかるくころがる。

夕暮。もう家のなかはずつかりくらい。留守で人の居ない庭へ
面してあけ放たれている さっぱりした日本間。衣桁の形や椅子

の脚が、逆光線で薄やみの中に黒く見える。つめたいさむさ。土の冷えが来るような庭のしめり。

○西日のよくあたる梢の上かわだけ紅葉しているもみじ。

○すっかり黄色い七分どおり落ちた梧桐、

○銀杏の葉のふきだまりが土蔵の横に出来ている。

○便所にいる。

ギヤーギヤーとまるで お上でものをいうのとはちがった声色で ふざけ笑っている女のこえ。

午後

サイレンはついききおとしたが 方々の寺で鐘がなり、それに
合わせるように 裏通りで 豆腐屋のラツパがしきりに鳴る、そ
ういうあたりの活気をひろ子は 物珍しく感じた。

頭をあげて そとを見た。

曇った日

となりで

アアちゃん

という声、シヤラシヤラおまつりのたすきに鳴るような鈴の
音がしている。

或女の人相

そのひとはどこが変っているというのではないが 目玉が丸く
黒くなったように 瞼の間にある艶やかさが ぬけてしまってい
る。寂しく不安なような表情、紅がついている小さい口がよく動
き たつぷりした頬に白粉があるだけ却って。

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第十八巻」新日本出版社

1981（昭和56）年5月30日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第2版第1刷発行

初出：同上

入力：柴田卓治

校正：磐余彦

2004年2月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

情景（秋）

宮本百合子

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>